

4 女性特有のがん、小児がん、難治性がん等の対策

乳がん、子宮がん、卵巣がんなど女性特有のがんや小児の死亡原因の半数以上を占めているものの症例数が少なく希少性の高い小児がんや膵臓がん、肝臓がん、肺がんなど、罹患すると完治が難しい難治性がん等について、それぞれのがんの特性に応じた対策が求められています。

現状と課題

- 59歳までにがん罹患する女性が、男性のがん患者数を上回っている状況にあり、特に、乳がん、子宮頸がん、卵巣がんなどのがん患者は、全体の3分の1を占めていますが、定期的ながん検診を受けることにより、早期発見が可能となるため、検診しやすい環境づくりの一層の推進が必要です。

また、乳がん検診や子宮がん検診の無料クーポン事業の実施に伴い、受診率は向上していますが、国の検診受診率の目標である50%には達していない状況にあり、検診受診率の向上が課題となっています。

- 小児がんは、5歳以上の子どもの病死原因の第1位となっており、その特徴としては、成人のがんと異なり生活習慣とはあまり関係はなく、乳幼児から思春期、若年成人まで幅広い年齢に発症し、希少で多種多様ながん種からなっています。全国の小児がんの年間患者数は2,000~2,500人程度で、小児がんを扱う施設は約200程度と推測されています。

なお、今年度新たに指定された小児がん拠点病院に関して、今後、小児がん拠点病院と地域の医療機関との連携体制の構築について検討をする必要があります。

- 膵臓がんをはじめ、肺がん、胆道がん、卵巣がん、食道がん、肝臓がんなど5年生存率が50%以下の難治性がんのうち、北海道の膵臓がんと肺がんの罹患率は47都道府県で1位となっている状況にあり、難治性がんについて有効な診断や治療の方法についての研究の促進が必要です。

- 国の基本計画に登載された膵内分泌腫瘍や消化管間質腫瘍などの希少がん対策については希少がんの有病率が低いことや情報不足により適切な診断や治療を受けていない人も多いとみられ、症状が出てから正しく診断されるまでに相当年数を要する例も少なくありません。

また、患者数が少ない上に種類も発生部位も症例も様々であることから、原因の解明、治療方法や新薬の開発等において、症例研究や専門家の養成が進まない状況にあります。

そのため、医療関係者を含めた道民への正しい知識の普及が必要となっています。

施策の方向

- 女性特有のがんに係る対策については、たばこが若い女性の健康に与える影響についての普及啓発を行うとともに、性別や職業等に関わらず道民すべてが女性特有のがんの特性を理解するための施策を推進し、女性ががん検診を受診しやすい環境づくりに向けた施策を推進します。
- 小児がん対策については、道内における小児がん医療の実態把握に努めるとともに、国が指定する小児がん拠点病院を中心とした関係医療機関との連携や、適切な情報提供、相談支援を行う体制を整備します。
- 難治性がん対策については、難治性がんに関する道民の理解の促進、拠点病院を中心とした関係医療機関との連携や、適切な情報提供、相談支援が行える体制の整備を進めます。
- 希少がん対策については、希少がんに関する道民の理解の促進や、適切な情報提供、相談支援が行える体制の整備を進めます。

個別目標

- 小児がん拠点病院と関係医療機関との連携体制を確保します。